

ヒルフェ通信(3月号)

❀ そっと寄り添いやさしくサポート ❀

「公益社団法人成年後見支援センターヒルフェ」は高齢者、精神障がい者、知的障がい者等の権利の擁護及び福祉の増進に寄与することを目的として、東京都行政書士会が設立した法人です。



◆みんなで知ろうシリーズ【3】

認知症への理解～ 認知症の人の気持ち、あなたにわかりますか？

*** 受診** 認知症には「治らない病気」というイメージがあります。この絶望的な恐怖におびえるあまり、本人も家族もなかなか「病院へ行こう」と決断できないのも無理はありません。今では医学の研究も進み、進行を遅らせる薬というのもあるようですが、本人も家族もはっきり知りたい反面、認めたくないという不安と「家族の重荷にはなりたくない」「でも放っておけない」などの葛藤があるようです。

・本人が気づく ひどいもの忘れを自覚したころから、身に覚えのない濡れ衣を着せられたり、家族や知人との度重なるトラブルを経験します。「やはりおかしいのは自分なのでは？」とを感じるようになっていきます。



・本人の気持ち・・・ 年齢相応じゃないのか？もっとしっかりできるはず・・・すべて忘れたわけじゃない。治らない病気と言われたくない。人には言えない・・・。病院に行ったほうがいいかしら？でも一人じゃいけないし、どうしていいかわからない・・・。

・家族が気づく 部屋にこもり、人に会わなくなってきた。同じ話を何度もしたり、また何度も聞き返す。場所や時間をしょっちゅう間違える。「お金がない」「あれが無いこれが無い」と何度も言って探している。引き出し等を何度も開け閉めするなど、意味のない動作を繰り返す。今までおしゃれに気遣っていたのが、全く気にしなくなりだらしのない印象になってきた・・・などなど。

認知症の人の変化に気づくのはやはり最も身近にいる家族です。「歳だからしかたないか・・・」との思いから、「やはり少し度が過ぎるぞ、やっぱりおかしい！」に変わり、認知症を意識するようになっていきます。

認知症といえば、食事の制限や排泄など身の回りのことができなくなって、すべて他人の世話になり、いつか家族の顔すらわからなくなってしまう――。そんな自身の衰えに嫌悪し、自分の情けない姿を想像してしまいます。

受診を考えるころの認知症の人は、自分の変化を自覚しながらも、結果を知って次の一步を踏み出そうという勇気が出てきません。大きなストレス、重圧との闘いです。そのつらさは周囲の人の想像以上かと思われれます。

◆コロナウィルス禍のもとでの無料相談会

ヒルフェ世田谷地区では、原則として3カ月に一度地域の方々を対象にして成年後見に関する無料相談会を開催しておりますが、令和2年からの新型コロナウイルス感染症流行の影響は無料相談会にも及び、同年6月4日の相談会は中止となりました。また、その後の相談会にも2回の延期がありました。

現在も感染者の増加傾向があれば、相談会を開催するかどうかを地区会員間で検討することにしております。状況は1回ごとに異なり、また外部の方がお見えになることから慎重な考慮が必要になります。ただ、多人数が集まる催しではないこともあって、十分な感染防止対策をとることを前提に、おおむね「会場が使用可能なら開催する」という基準ができつつあります。

再開した令和2年10月以降の相談会では、アクリル板の使用、非接触型体温計による体温測定(以上はヒルフェ本部からの貸与)、相談員のマスク着用、アルコールによる手指の消毒・テーブル等の消毒、部屋の換気等の感染予防対策を実施いたしました。また、これまでは予約を不要としてきたのですが、密集回避の見地から予約をしていただく方針に変更いたしました。

幸いなことにコロナ禍のもとでも毎回相談者が来場され、これまで相談者ゼロの会はありませんでした。

ヒルフェの地区に限らず、活動の継続について悩みを抱いていらっしゃる団体も多いかと思えます。この報告が皆様のご参考になれば幸いです。(世田谷地区リーダー 東村次郎)